

氏 名 荒川 亜樹
学位の種類 博士(社会学)
学位授与年月日 2013年3月31日
学位論文の題名 ポジティブ・エイジング論の再構成と「シンプル・ライフ」の考察
—危機的集落と都市の高齢者の事例研究から—

【論文内容の要旨】

本論文は、高齢者の豊かな老いをめぐる社会学的研究において、従来の「サクセスフル・エイジング」研究が、社会関係の有用性を明らかにしたことを評価しつつも、「幸福な老い」の多様性を十分に捉えきれていない点を問題視する。特に限界集落などの異なった環境にある高齢者や虚弱高齢者をひとくりにする研究の不十分さを指摘し、それを補い新たに発展させようとする試みが本論文の課題である。そのために、虚弱高齢者、過疎居住高齢者を含む、異なる生活環境に居住する2グループの高齢者（都市居住デイサービス利用高齢者と、危機的集落独居高齢者）への質的調査の比較を行ない、また独自の「相互作用論的社会化論」の視点から分析する方法をとることによって、高齢者一人ひとりのポジティブ・エイジング構築過程を詳細に明らかにすることで、本課題に迫ろうとしたものである。

1. 本論文の構成

本論文は9章の構成となっている。第1章では過疎過密化が、高齢者の幸福追求のための環境や資源に著しい格差が生じていることを指摘している。第2章と第3章と第4章は先行研究のレビューを行い、本論文での研究課題と方法の探求を行っている。第5章および第6章において、都市居住虚弱高齢者と危機的集落独居高齢者の分析を行っている。第7章と第8章においては「ポジティブ・エイジング支援」の課題を検討している。そして、終章では、研究を総括しポジティブ・エイジングが社会福祉支援として取り組まれる必要性と多様な老いの価値が共有される方向でのポジティブ・エイジング研究の課題を提示している。

目次構成は以下のようにになっている。

第1部：研究の背景

序章 本稿の目的と構成

第1節 研究の背景

第2節 研究の目的と意義

第3節 本論文の構成

第1章 我が国における過疎化の背景

第1節 過疎とは

第1項 過疎の定義

第2項 過疎の進行状況

第3項 集落の消滅

第2節 過疎の背景

第1項 過疎化の構造

第2項 過疎の背景～都市化と過疎化～

第3項 過疎化と世帯規模の縮小

第4項 老親と退出子の遠距離化

- 第5項 過疎高齢化
- 第3節 過疎と政策
 - 第1項 過疎政策の動向
 - 第2項 過疎地域における医療問題
 - 第3項 過疎高齢者の生活を支える介護保険制度
 - 第4項 過疎政策と介護保険制度の非連関関係
- 第4節 過疎研究の動向
 - 第1項 過疎地域の生活実態
 - 第2項 限界集落論の現在
 - 第3項 権利行使の格差問題
 - 第4項 過疎問題の類型
- 第5節 高齢者における「古い」の価値意識の動向～1971年から2010年～
 - 第1項 老後の不安
 - 第2項 介護を受けたい場所
 - 第3項 家族介護意識
- 第2部：理論研究
 - 第2章：老年社会学の理論的展開
 - 第1節 老年社会学の理論体系とサクセスフル・エイジング
 - 第1項 老年学の背景
 - 第2項 離脱理論
 - 第3項 活動理論
 - 第4項 継続性理論
 - 第5項 サクセスフル・エイジング
 - 第6項 プロダクティブ・エイジングとアクティブ・エイジング
 - 第2節 高齢者の多様な幸福にむけて～ポジティブ・エイジング～
 - 第1項 サクセスフル・エイジングの二元論的視点への批判
 - 第2項 SWB（主観的幸福感）と年齢との関連について
～量的調査からみるポジティブ・エイジングの存在～
 - 第3節 おわりに～老年学研究の動向と課題～
 - 第1項 老年学研究の動向の整理
 - 第2項 老年社会学の理論的展開の可能性
 - 第3項 おわりに
 - 第3章 ジェロトランセンデンス理論の到達点と課題
 - 第1節 西洋文化と東洋文化としての禪～老年期の発達に与える影響～
 - 第2節 ジェロトランセンデンスの概要
 - 第3節 ジェロトランセンデンスの発達パターン
 - 第4節 ジェロトランセンデンスの実証研究～ジェロトランセンデンスの実用性～
 - 第5節 ジェロトランセンデンスに基づく臨床現場における理論的ガイドライン
 - 第6節 ジェロトランセンデンス理論の課題
 - 第1項 批判1：ジェロトランセンデンスの構造の可視化

- 第2項 批判2：トーンスタムの本質主義的，個人主義的な視点
- 第3項 批判3：個人主義的であるジェロトランセンデンスとその発達過程分析の欠如

第7節 おわりに

- 第1項 個人的適応の重要性を重んじる新たな価値
- 第2項 ジェロトランセンデンス研究の課題
- 第3項 ポジティブ・エイジング研究としての今後の課題

第4章 ポジティブ・エイジング理論の到達点と課題

第1節 ポジティブ・エイジングをめぐる視座～ガーゲンによる研究～

- 第1項 ガーゲンによるポジティブ・エイジングの視座
- 第2項 The Lifespan Diamond
- 第3項 ガーゲンによるポジティブ・エイジングにおける対象の偏り

第2節 ポジティブ・エイジングをめぐる視座～ヒルによる研究～

- 第1項 ヒルによるポジティブ・エイジングの視座
- 第2項 THE SEVEN STRATEGIES FOR POSITIVE AGING
- 第3項 ヒルのポジティブ・エイジングの独自性

第3節 ポジティブ・エイジングの認識論的特長と定義～理論的到達点～

- 第1項 ポジティブ・エイジングにおける他者との関係性による影響とは
- 第2項 ポジティブ・エイジングは，超社会的か？
- 第3項 「古い」の捉え直しと肯定的意味付け
- 第4項 ポジティブ・エイジングの定義について～心理学的定義～
- 第5項 「あるがまま」を生きる～人生における「意味」探しは重要か？～

第4節 おわりに～ポジティブ・エイジングにおける今後の研究課題と社会学的分析必要性～

- 第1項 相互作用論社会化論としてのポジティブ・エイジング～個人と社会の関係～
- 第2項 ポジティブ・エイジングにおける社会学的分析の必要性
- 第3項 虚弱高齢者のポジティブ・エイジングとその援助可能性について
- 第4項 今後の研究課題

第3部：実証研究

第5章 都市居住高齢者のポジティブ・エイジングとその類型

～「存在，生，古い」への肯定的志向と自立性からの超越～

第1節 調査の背景

第2節 調査の方法

- 第1項 調査対象者
- 第2項 調査の目的と，データの分析方法
- 第3項 倫理的配慮

第3節 調査結果

- 第1項 調査対象者の概要
- 第2項 生成されたカテゴリーと概念

第4節 調査の考察①概念分析

- 第1項 ポジティブ・エイジングにおける，過去，現在，未来へのまなざし
- 第2項 (ア) (イ) (ウ) 全ての段階で，肯定的な意味付けがされている事例

～「生きる目標の外在性」を中心に～

第3項 (ア) (イ) (ウ)のうち一部及び全ての段階で否定的な意味付けがされている事例

1. 自己の存在否定と独我論的世界観
2. 葛藤と楽天主義

第4項 「自立性」の構造

1. 肯定的意味付けにおける「自立性」
～重要な他者との相互作用から見いだされる「生きる目標の外在性」と「権利性」の獲得～
2. 否定的意味付けにおける「自立性」
3. 「役割」の継続と取得～イデオロギーへのとらわれ～

第4節 調査の考察②先行研究との比較からみる虚弱高齢者のポジティブ・エイジングの特徴

第1項 トーンスタムのジェロトランセンデンスとの比較

第2項 ガーゲンとヒルによる研究との比較

第3項 意味への意思からの解放～「あるがまま」～

第4項 先行研究との比較からみる虚弱高齢者のポジティブ・エイジングの特徴

第5節 ポジティブ・エイジングの類型

第1項 ポジティブ・エイジング類型の方法

第2項 ポジティブ・エイジング類型の特徴と分化過程

1. ⑥生執着型
2. ⑤楽天主義型
3. ④葛藤型
4. ①ポジティブエイジング～価値転換・意味重視型～
5. ②ポジティブエイジング～あるがまま型～
6. ③ポジティブエイジング～超越型～

第3項 段階的ポジティブ・エイジングから見えてくる「シンプル・ライフ」の重要性

～様々な拘束から自由となった「状況の再定義」～

第6節 相互作用論的社会化論のポジティブ・エイジング

第1項 「自立性」と「良い親役割」～社会的存在としての高齢者～

第2項 相互作用による「古い」の「再帰的社会化」

第3項 介護という行為がもたらすもの～介護者が高齢者と社会をつなぐ～

第4項 介護という行為がもたらす意味①～社会的承認を示す態度～

第5項 介護という行為がもたらす意味②

～非ポジティブ・エイジング類型からみる、介護による新たな拘束～

第6項 「権利性」をめぐる闘争

第7項 「楽天主義」と戦略的適応

第8項 問題を潜在化してしまう「楽天主義」

第7節 おわりに

第6章 継続的調査からみる危機的集落独居高齢者のポジティブ・エイジング

第1節 調査の背景

第2節 調査の概要

第1項 調査対象地域の選定理由

第2項 調査地概要

1. 調査地の高齢者人口構造
2. 調査地区の選定
3. 調査の目的と方法
4. 倫理的配慮

第3節 調査分析

第1項 分析方法と生成された概念 2005年調査

第2項 分析方法と生成された概念 2012年調査

第4節 調査分析

第1項 生活実態とその変化

1. 〈身体的変化〉：身体機能の低下と命の危機
2. 〈生活の変化〉：身体機能の低下による離職と農作業時間の縮小による、生活費の削減と生活周辺環境の未整備
3. 〈情報源の変化〉：対人関係の縮小による集落外社会との交流断絶傾向
4. 〈交通手段〉：身体機能の低下に伴う家族支援の増加と、移動に伴う命の危険
5. 〈近隣関係〉：近隣との対等な関係における交流頻度の減少と遠慮
6. 〈家族関係〉：親密でありながら独立した家族関係と、身体機能の低下に伴う家族支援の増加
7. 〈「自立性」と老いの価値観、及び精神的変化〉：介護機能を備えることのできない社会における「老い」への不安
8. 〈将来への不安〉：未知の未来への不安と生活の継続
9. 〈孤独死という最悪の想定〉：そうならないための努力
10. 〈「しかたない」への帰結〉：変化を求めず、「あるがまま」受け入れる
11. 「権利性」に代替する「家族への基本的信頼」
12. 危機的集落独居高齢者の介護意識

～第1章、第5節：高齢者における「老い」の価値意識の動向との比較から～

第5節 調査分析②～相互作用的社会化論としてのポジティブ・エイジング分析～

第1項 「良い親役割」と「家族への基本的信頼」を結ぶ「しかたない」
～「権利性」を代替するもの～

第2項 前提条件だらけの「状況の再定義」～「自立生活のための自立」～

第6節 危機的集落独居高齢者のポジティブ・エイジング

- 第1項 事例① Uさんの事例～一人で暮らすことへの自由～
- 第2項 事例② Sさんの事例～子のない世帯における孤独死と変化への恐怖～
- 第3項 事例③ Mさんの事例～行ったり来たりの半同居生活～
- 第4項 事例④ SHさんの事例～喪失への反発と、突然の自立生活の限界～
- 第5項 事例⑤ Oさんの事例～「家族への基本的信頼」への極度の依存～
- 第6項 事例⑥ Hさんの事例～「あるがまま」への転換～
- 第7項 事例⑦ Tさんの事例～同居開始による人間関係の拡大～
- 第8項 事例⑧ Yさんの事例～価値転換・意味重視型から葛藤型へ～

第7節 危機的集落独居高齢者のポジティブ・エイジングの潜在的問題～批判的考察～

第1項 「家族への基本的信頼」に潜む危機～依存と共倒れ可能性～

- 第2項 前提条件だらけの「状況の再定義」の袋小路
～コントロールの可能性を開くポジティブ・エイジング～
- 第3項 権利行使の格差の実態
～「気持ちのもちようで、どうかしようとする」ことの問題性と潜在的ニーズ～

第8節 おわりに

- 第1項 危機的集落における自立生活の構造
- 第2項 在宅介護支援、生活支援の重要性～未知の未来から、想像可能な未来へ～
- 第3項 「しかたない」と、ポジティブ・エイジングを巡る不平等問題
- 第4項 都市居住高齢者と危機的集落独居高齢者のポジティブ・エイジングの共通点
- 第5項 都市居住高齢者と危機的集落独居高齢者の基礎的な生活社会の構図
- 第6項 おわりに

第4部：ポジティブ・エイジング支援と課題

第7章：ケアワーカーのソーシャルワーク機能によるポジティブ・エイジング支援

- 第1節 問題提起～介護保険の限界に対する社会福祉支援～
- 第2節 ポジティブ・エイジングにおけるケアワーカーの役割とその重要性
 - 第1項 ケアワーカーの機能
 - 第2項 ケアワーカーにおけるソーシャルワーク機能
 - 第3項 生活支援とポジティブ・エイジング
 - 第4項 コミュニティ・ソーシャルワーカーによるニーズキャッチ
- 第3節 危機的集落独居高齢者の事例からみる、ケアワーカーによる生活支援機能の有効性
～ポジティブ・エイジング支援の可能性～
 - 第1項 危機的集落独居高齢者、Sさんの場合～生活状況～
 - 第2項 危機的集落独居高齢者、Sさんの場合～支援必要性～
 - 第3項 危機的集落独居高齢者、Sさんの場合～ポジティブ・エイジング支援～
- 第4節 おわりに
 - 第1項 社会福祉専門職による個人次元・社会次元のポジティブ・エイジング
 - 第2項 「生活支援」の重要性と、それを阻むもの
 - 第3項 ポジティブ・エイジング支援の指針

第8章 全国の買い物弱者事例からみる都市と過疎地における生活支援事業

- 第1節 都市居住高齢者との事例比較
 - 第1項 買い物弱者とは
 - 第2項 買い物難民の背景
 - 第3項 買い物弱者の背景～都市と農村～
- 第2節 日本全国の買い物弱者事例
 - 第1項 東京都新宿区、戸山団地の事例
 - 第2項 危機的集落独居高齢者の事例との類似点
- 第3節 買い物弱者の現状と解決に向けた取組
 - 第1項 多角的な対応が期待される買い物弱者対策
 - 第2項 買い物弱者への対策
- 第4節 買い物弱者問題をめぐる今後の課題

第5節 おわりに

終章 ポジティブ・エイジングとその課題～より多様な老いが共存する社会を目指して～

第1節 本研究のまとめ

第2節 相互作用論的社会化論によるポジティブ・エイジングの普及と期待される効果

第3節 「地域ターミナルケア」と「むらおさめ」～集落と人～

第4節 「むらおさめ」「地域ターミナルケア」としての地域福祉計画

第5節 おわりに

2. 本論文の内容

第1章では、我が国の高齢者をとりまく社会的背景として、過疎過密の両極分解が、高齢者の幸福追求のための環境や資源に著しい格差を生じさせていることを確認し、政府の世論調査から、高齢者の介護意識や、「老い」への不安感などには、社会的背景が非常に大きな影響を及ぼしていることについて指摘している。

第2章では、これまでの「サクセスフル・エイジング」研究が、著しく資源の欠乏した環境にある高齢者（過疎居住高齢者）を研究射程に含んでいないこと、虚弱高齢者までが研究射程に含まれていなかったことに対して批判的考察を行っている。そこで老年学における心理主義化の動向を確認し、高齢者の「幸福な老い」は多様であるのに主観的幸福度の測定ではその実態がとらえられないことを指摘している。

第3章では、より多様な「幸福な老い」をとらえるために、「サクセスフル・エイジング」研究のメタ分析を行うトーンスタム（Tornstam, 2005）のジェロトランセンデンス研究をレビューし批判的検討を行っている。この研究は、本質主義のためにポジティブ・エイジングの多様性をとらえることができず、文化の影響を検証するには至っておらず、普遍性の実証は不十分な状態にあることを確認している。

第4章では、社会構成主義の立場から質的調査によってポジティブ・エイジング研究を行う、ガーゲン夫妻と、心理学者のヒルの研究の批判的検討を行い、彼らは、「老い」の価値は可変的であり、他者との関わりのなかで変容し、ポジティブ・エイジングの可能性が開かれてくることを指摘していることを確認した。しかし、いずれの研究者も、研究対象に虚弱高齢者や過疎居住高齢者を含んでおらず、ポジティブ・エイジングをより深く理解するために、「相互作用論的社会化論」のような社会学的分析枠組みが重要であることを指摘している。

第5章では、マイノリティに位置付けられる高齢者のポジティブ・エイジングをとらえるために、まず都市居住虚弱高齢者に対してライフストーリー・インタビューと半構造化面接を行い、①価値転換・意味重視型、②あるがまま型、③超越型、④葛藤型、⑤楽天主義型、⑥生執着型の6つの類型にポジティブ・エイジングの類型化を行っている。そして、「相互作用論的社会化論」による分析によって、ポジティブ・エイジングは、「状況の再定義」と「シンプル・ライフ」によって説明可能であること、そしてそれらは「再帰的社会的化」として位置付けることができることを指摘している。また、都市居住高齢者は、自立の価値を家族の世話にならない「良い親役割」へと変容させ、脱却することで、虚弱な身体を否定せず受容していることも確認している。

第6章では、危機的集落独居高齢者への継続調査を行い、制限された環境のなかで「状況の再定義」を行い、各々の保有する社会資源の範囲内でポジティブ・エイジングを達成していたが、社会資源の欠乏から、それらは家族依存的になる傾向があることを確認している。同時に、都市居住高齢者と同様に、家族の世話にならないという「良い親役割」を有しておりこの矛盾が、危機的集落独居高齢者の将来を非常に不安定なものにしており、その原因が農村地域の「権利行使の格差」にあることから、それは明らかな不平等問題であると指摘している。

第7章では、ポジティブ・エイジングの可能性を制限する様々な社会問題に対して社会福祉支援を行うことで、ポジティブ・エイジングの可能性が開かれてくることを指摘している。

第8章では、全国的な買い物弱者問題とそれへの支援事例を検討することで、多元的で複合的な支援方法の可能

性を確認したが、多元的資源の豊富な都市部とは異なり、過疎地域では公的支援の充実が急務であることを指摘している。

終章では、ポジティブ・エイジングの支援とは、「幸福」への可能性を開くことであると捉え直し、それは危機的集落独居高齢者においては、「むらおさめ」や「地域ターミナルケア」という社会福祉支援として取り組まれる必要があることを提案し、マイノリティとして位置付けられる高齢者の潜在的ニーズや、社会的問題は、社会福祉専門職のソーシャルアクションによって、広く社会に共有化され、社会次元でのポジティブ・エイジングが目指される必要性を指摘している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は以下の点で評価できるものである。

(1) 第2章から第4章における、離脱理論やポジティブ・エイジング論を、虚弱と健康、過疎と都市という二つの軸を基礎に据えて検討し多様性の観点が必要であることを指摘している。さらに、「相互作用論的社会化論」とも言える社会学的分析枠組の提示が必要であることを導出し、続く実証研究で生かしている。これは老年学の学説史の単なる整理・検討にとどまらず、そこから新たな課題と分析方法をひきだし、興味深い事例を丁寧に分析しているという点でも優れたものである。

(2) 第5章、第6章において質的調査によって、重要な他者との相互作用家や介護者との相互作用分析を組み込んだ分析を行ない、ポジティブ・エイジングの六つの類型を抽出したこと、さらに、都市においても過疎地においても、虚弱高齢者が自立の価値を「良い親役割」へ変容させることで、虚弱な身体を否定せず受容していることを提示した点は、本研究の独自の知見である。同時にそうした受容が危機的集落独居高齢者においては将来を不安定にしており、その原因として権利行使の地域格差が存在し、そこに社会性を見出している点も独自の着眼として評価できる。

(3) ポジティブ・エイジング研究の知見を理論的・実証的に深めることにより、高齢者の生活支援や生活環境整備などの領域との関連性を明らかにし、その領域の意義づけや問題性を、その人自身の生き方に関わる問題として把握する地平が拓かれている。またそのような観点から重度要介護者の在宅化、軽度者外し、地域格差容認の政策の問題性が深く捉えなおさせる点も老年社会学的アプローチの現代的で実践的な意義を明示したものとして高く評価できる。

以上のようにように高く評価しうる本論文ではあるが、さらに明確にされるべき点や残された課題もある。

(1) 虚弱—健康、資源配分の二つの軸を設定したタイポロジーを提示することで、論点がより明確になったと思われる。また、ポジティブ・エイジングを「自己の存在、生、老い」への肯定的意味づけとして整理しているが、それでは論点が拡散するきらいがあり「老いへの肯定的意味づけ」として方が、質的調査の結果とも呼応し、より論点が鮮明になったと思われる。また、ポジティブ・エイジングは資源配分の構造が影響するという点も、第4章の最後で明記されておれば、第5章や第6章の実証研究との関連もより明確になったと思われる。

(2) 実証研究において、対話の中で明らかになった語りのうち、本人の生活の中での実践的な行為として生きていることなのか、それとも調査者との対話の中で構築されたものなのかという吟味が必要である。また、高齢者によって語られたことが時間の経過の中で揺れることもしばしばであり、その幅をみることも必要である。この点は、本人との長期に亘る援助実践などの関わり中でやっとなら把握できることもあり、引き続き吟味が期待される。

(3) ポジティブ・エイジングのためには社会福祉支援やソーシャルワーク実践が重要であるとの指摘は一般的なレベルにとどまっている。さらに具体的な組織・財政面から深める必要があるし、「村おさめ」も唐突的な感があり、「むらおさめ」をしないですむような方向性もありえないのかの検討も必要である。この点は、ニュージーラン

下の政策支援の研究を含め今後の課題であると学位申請者も自覚していることが確認された。

以上のような、より明確にされるべき点や残された課題はあるが、本論文の高い評価をくつがえすものではない。老年社会学とりわけ、ポジティブ・エイジング研究の視点や成果を社会福祉領域に生かした研究は、極めて少なくさらなる研究の継続と深化が期待される。上記の、問題点を中心とした公聴会での応答にも的確に答えて、遺漏がなく、審査委員会は一致して、本論文が博士学位を授与するにふさわしいものと判断した。

【試験または学力確認の結果の要旨】

本博士学位請求論文の公聴会は、2013年6月27日（木）10時40分から12時20分まで、産業社会学部小会議室にて行われた。審査委員会は、公聴会の質疑応答を踏まえ、各委員の意見交換の結果、本博士学位請求論文が、博士を授与するに値するものであると全会一致で判断した。

なお、荒川亜樹氏は、学術論文3本（すべて単著で2本は査読あり）を有し、本学位請求論文において多数の英語文献を活用・検討しており英語文献の読解においても優れており、十分な専門知識と、豊かな学識を有するものと、審査委員会は判断した。

以上から、審査委員会は申請者に対し、本学学位規程第18条第1項に基づいて「博士（社会学 立命館大学）」を授与することが適当であると判断する。

審査委員	(主査) 石倉 康次 立命館大学産業社会学部教授
	(副査) 小川 栄二 立命館大学産業社会学部教授
	(副査) 宝月 誠 京都大学名誉教授